

水稲新品種「サイワイモチ」について

小野敏忠・本村弘美・井辺時雄・赤間芳洋・渡辺進二・志村英二・西山 寿・岡田正憲・和佐野喜久生
(九州農業試験場)

ONO, T., H. MOTOMURA, T. IMBE, Y. AKAMA, S. WATANABE, E. SHIMURA, H. NISHIYAMA, M. OKADA and K. WASANO :
The New Rice Cultivar "SAIWAIMOCHI"

水稲西海糯159号は、1982年より鹿児島県で奨励品種として採用され、通称名を「サイワイモチ」として普及に移された。そこで育成経過ならびに特性概要を報告し、普及上の参考に供したい。なお本品種の育成は関係各府県農業試験場の係官の御協力によるところが大きく、ここに感謝の意を表する。

1. 来歴ならびに育成経過

本品種は、1970年より九州農業試験場(筑後市)において、レイホウを母、西海糯129号(クレナイモチ)を父とした交配組合せから、F₁~F₃を世代促進し、F₄で個体選抜を行い、F₅以降系統育種法により選抜・固定を図ってきたものである。1978年より「西海糯159号」の系統名で関係県に配付して地方的適否を検討し、1982年5月「水稲農林糯267号」として登録され、「サイワイモチ」と命名された。1982年現在でF₁₄である。

2. 特性の概要

1) 形態的特性 クレナイモチに比べ稈長は約10cm短く、やや短稈で穂数型の糯品種である。稈はやや細いが、剛柔は中程度で、耐倒伏性はアカネモチほどではないが、クレナイモチに優る。葉色はやや濃く、止葉は直立する。稀に短芒が生じ、ふ先色が赤褐、えい色が赤褐~褐で、梗品種との識別は容易である。脱粒性はやや易である。

玄米は中形で、やや小粒であるが、クレナイモチとアカネモチより大きい。玄米の外観品質は優れ、搗精歩合が高い。餅はやや硬めながら、白度は高く、食味はクレナイモチと同等である。

2) 生態的特性 出穂期、成熟期ともにクレナイモチより1~2日遅く、育成地では中生の晩に属する。生産力はクレナイモチとアカネモチに優り、糯品種としては多収である。穂発芽性はやや易である。

いもち病に対して真性抵抗性遺伝子 *Pi-ta*² を持つと推定され、ほ場抵抗性は中程度と判定された。白葉枯病については黄玉群に属し、ほ場抵抗性はやや弱い。イネわい化病にはクレナイモチよりやや強く、中程度である。他のウイルス病やウンカ・ヨコバイ類には抵抗性を持たない。

特性から見て、サイワイモチは、クレナイモチを強稈・多収化したものといえるが、一方白葉枯病抵抗性など不十分な点もあり、耐虫性の付与も含め今後改善の余地がある。

第1表 一般特性

形 質	サイワイモチ	クレナイモチ	アカネモチ
早 晩 生	中生の晩	中生の晩	晩生の早
草 型	やや短・穂数	やや長・穂数	極短・穂数
稈長(cm)	77	85	64
穂長(cm)	17.3	18.3	17.6
穂数(本/m ²)	467	444	455
芒の多少・長短	稀・短	稀・短	稀・短
ふ 先 色	赤褐	赤褐	赤褐
え い 色	赤褐~褐	赤褐~褐	赤褐~褐
脱 粒 性	やや易	やや易	やや易
耐倒伏性	やや強	中	強
穂発芽性	やや易	やや難	易
抵 抗 性	葉いもち 中 白葉枯病 やや弱 イネわい化病 中	やや弱 中 やや弱	弱 やや弱 中
玄米重(kg/a)	54.7	53.2	50.2
玄米千粒重(g)	20.1	19.8	19.1
玄米品質	上下	中上	中上
食 味	中上	中上	中上

注)九州農試標肥栽培、1978~1981年の4ヵ年の成績

3. 適地及び奨励品種採用県

九州地方の平坦地から中山間地に適すると考えられる。冷害の発生しやすい高冷地あるいは白葉枯病の常発地帯には適さない。1982年より奨励品種として採用された鹿児島県ではヒヨクモチ、サツマモチを対象に約1000 haの普及が見込まれ、認定品種として採用予定の大分県ではアカネモチなどを対象に約500 haの普及が見込まれている。

4. 栽培上の注意

アカネモチ、ヒヨクモチほどの耐倒伏性はないため、極端な多肥栽培は避ける。抵抗性の不十分な白葉枯病には常発地では適切な防除手段を講じる必要がある。いもち病は真性抵抗性により通常発病は見られないが、菌型の変化に注意を要する。他の病虫害には対しては慣行に従う。

5. 命名の由来

多収・良質で栽培の容易な本品種の普及が幸いをもたらすことを意味する(幸糯)。